

## 複合助詞マデモの意味と用法

- マデモナイとナイマデモに着目して -

言語学・応用言語学専攻

ILT02075T

平成 14 年入学

鈴木さやか

平成 18 年 1 月提出

### 要旨

本論では、「ナイ」「マデ」「モ」の組み合わせ表現である「ナイマデモ」と「マデモナイ」について考察を行い、ナイマデモとマデモナイが全く違った意味を持つ要因について分析を行ったものである。先行研究によりナイマデモはケレドモの置き換えが可能であるとされており、私はその点に興味を持った。マデモを使用し似たような表現であるのに、マデモナイは「～に及ばない」といった意味合いを持ち、ナイマデモはケレドモのような逆説的な意味合いを持っている。このような違いが一体どこから生まれるのであろう、そういった素朴な疑問からこの論文は始まった。まずマデモナイとナイマデモの樹形図を分析していくことでそれらの構造を明らかにし、さらに意味の違いを生み出す要因として、自分なりの新たな提案を行った。その提案によりナイマデモナイといった表現も分析し、マデモを使用した他の表現に関する考察も試みている。本論文において、複合助詞マデモについての従来の研究に新たな側面からの考察を加えることで、日本語の複合助詞についての今後の研究に寄与できれば幸いである。

## 目次

0 . はじめに.....	1
1 . 先行研究.....	2
2 . マデモナイ .....	3
2.1.マデモナイの構造案 .....	3
2.2.考察.....	5
2.3.まとめ.....	6
3 . ナイマデモ .....	6
3.1.ナイマデモの一般的な構造案.....	6
3.2.「ナイ」「マデ」「モ」の組み合わせ表現に関する疑問点.....	9
3.3.提案： という要素を含むナイ.....	11
4 . 要素.....	12
4.1.色々な助動詞とマデモ .....	12
4.2.マデモナイ文への応用.....	13
4.3. 要素のまとめ .....	15
4.4. 要素とナイマデモナイ .....	15
4.4.1.ナイマデモナイの構造予測 .....	15
4.4.2.ナイマデモナイの tree .....	16
4.4.3.ナイマデモナイの構造のまとめ .....	18
5 . まとめ.....	18
参考文献.....	20

## 0 . はじめに

「～マデモナイ」という表現は、一般に、次のように使用されることが多い。

- (1) a. 花子が行くマデモナイ。
- b. あいつが成績優秀だということは言うマデモナイ。

このように、マデモナイは「Vするマデモナイ」で「Vする必要はない」「Vするには及ばない」といった意味を持つが、文末に使用できるのはもちろんのこと、文中でも使用でき、さらにその後に接続助詞を続けることもできる。以下はその中でも、接続助詞「ガ」が後に続く例である。

- (2) a. CDを買うマデモナイが、一曲だけ欲しいって事、ありませんか。
- b. ビデオに撮って見るマデモナイが、毎週見ている番組というのは結構ある。
- c. 救急車を呼ぶマデモナイが、家で様子を見るのは心配だ。
- d. 病院に行くマデモナイが、どうも調子が悪いみたいだ。
- e. わざわざ引き止めるマデモナイが、軽く声くらいはかけてやれ。
- f. レインコートを着るマデモナイが、小雨が降ってきた。
- g. 改めて言うマデモナイが、本書は全て英語で書かれている。
- h. 感想は聞くマデモナイが、どうやら素晴らしかったようだ。
- i. 敢えて書くマデモナイが、ネットは発展途上のメディアである。
- j. 長靴の危険性は教えるマデモナイが、実際に履いたまま水に浸かってみるとよく理解できる。

また、これらと似た表現として、マデモとナイの語順が入れ替わっている「～ナイマデモ」という表現がある。(2)の例文を、「～ナイマデモ」という表現を使った例文に規則的に置き換えてみると、以下のようになる。

- (3) (2)の置き換え
- a. CDは買わナイマデモ、一曲だけ欲しいって事、ありませんか。
- b. ビデオに撮っては見ナイマデモ、毎週見ている番組というのは結構ある。
- c. 救急車は呼ばナイマデモ、家で様子を見るのは心配だ。
- d. 病院には行かナイマデモ、どう調子が悪いみたいだ。
- e. わざわざ引き止めはしナイマデモ、軽く声はかけてやれ。

- f. レインコートは着ナイマデモ、小雨が降ってきた。
- g. ??改めては言わナイマデモ、本書は全て英語で書かれている。
- h. ??感想は聞かナイマデモ、どうやら素晴らしかったようだ。
- i. ??敢えて書かナイマデモ、ネットは発展途上のメディアである。
- j. ??長靴の危険性は教えナイマデモ、実際に履いたまま水に浸かってみるとよく理解できる。

このように見ていくと、マデモナイガとナイマデモは一見したところほぼ同じような意味で使用できるように感じるが、文によっては単なる置き換えでは容認がやや難しくなる例がでてくる。こういった例は、マデモナイやナイマデモが文中でどのような構造で働きかけているかを樹形図により明らかにしていくことで、より明確に違いを分析していくことができると考えられる。よって、以下では、これらの文をさらに詳しく分析していきたい。

## 1. 先行研究

従来なされてきた研究の中で、マデモナイやナイマデモのみを取り扱った研究は少なく、多くはマデやマデモに着目して分析を行っているものが多い。森田(1989)は、マデを大きく二つの用法に分けており、格助詞的用法と副助詞的用法とがあると述べている。マデは、大きな意味で言えば「人や事物の数量、時間・空間における継続した作用や状態、それらの至り及び範囲の限界点を示す語」森(1989-1072)であり、格助詞的用法は、「そのことを先生マデ知らせる」のような、行為の至り及び帰着点を指す用法であるとしており、副助詞的用法は、「そのことを先生まで信じた」のような「も」と置き換え可能な用法であるとしている。どちらの用法も、行為や状態がその手前で止まらずに広がり進んで「先生」のレベルに達する、継続しているものの到達点・限界点を表すと考えられている。また、庵(2001)は、意外な要素を付け加えたい場合にマデを用いると述べている。社会通念や予想では考えられないような事物を当然と思われる事物に付け加えるはたらきがあり、意外性がそこにあることを表現することができる。また、マデに取り立て助詞「も」が付いた表現マデモについては、マデに含まれている意外な気持ちを強調するはたらきがあると述べている。そしてマデモには、完全な段階には至らないがほぼ満足できる結果であることを表す場合にも用いる場合があり、この場合のマデモは「が/けれども」など逆接の接続助詞と置き換えられると述べている。

本論では、庵(2001)の「マデモには、完全な段階には至らないがほぼ満足できる結果であることを表す場合にも用いる場合があり、この場合のマデモは「が/けれども」など逆接の接続助詞と置き換えられる」という部分に注目する。例文としては次のよう

なものが挙げられている。

- (4) a. 真っ白とは言えない{までも/が}大体の汚れは落ちた。
- b. 金メダルとは言えない{までも/が}5位に入賞したのだから上出来だ。

庵(2001)

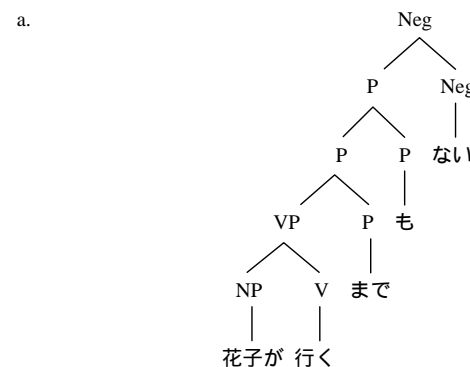
マデモとガヤケレドモは、どのような関係になっているのだろうか。本研究では、マデやマデモにのみ着目するのではなく、マデモナイやナイマデモというひとかたまりの表現に着目し、分析を行っていくこととする。

## 2. マデモナイ

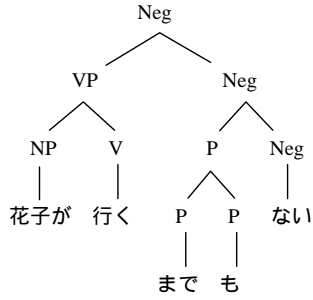
### 2.1. マデモナイの構造案

まずは、マデモナイの構造について分析を行う。(1)(2)のマデモナイの例文の全てにおいて言えることだが、これらの文構造を考えたとき、二種類の tree が候補にあがる。

- (5) (1a)の tree 案

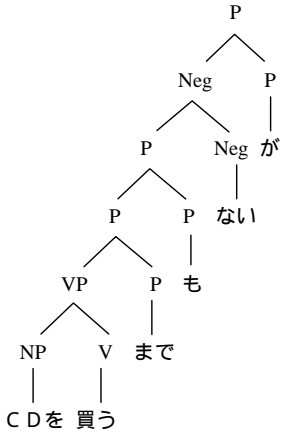


b.

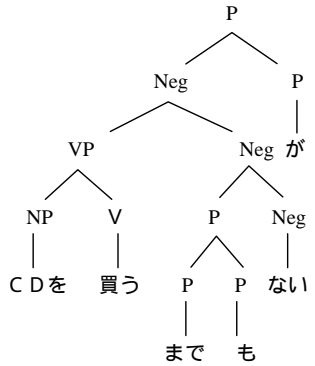


(6) (2a)の tree 案

a.



b.



## 2.2.考察

(5)においても(6)においても、aとbの構造の違いはマデモナイがどのようにかかっているかの違いである。あくまでも私の感覚ではあるが、aは「Vする、その行為にまでは達していないが」といったニュアンスを強く含んでいるように感じる。つまり「Vする」という行為自体に着目しており、その行為に至るまでには達していない、といった意味を表しているように感じられる。例えば(5a)の場合は「行く」という行為に着目しており、その行為に至るまでには達していないが、しかし「花子が立つ」「花子が見る」などという行為には達しているかもしれない、というようなニュアンスを含む文となっていると考えられる。(6a)の場合も同様に、「買う」という行為に着目しており、もしかすると「CDを手取る」「CDを聴く」などという行為には達しているかもしれない、といった意味合いの文となるのではないだろうか。それに対しbはマデモナイがまとまって一つの助詞としての働きを持っており、何らかの要素があるレベルまで全く及んでいない、達していない、といった意味合いを持つように感じられる。例えば(5b)の場合では、「花子が行く」というレベルまで何らかの要素が達していない、といった意味合いを持っている。(5a)とどういった違いがあるのかというと、aの場合だと先に述べたように、「行く」という行為自体に着目しているため、「花子が立つ」「花子が見る」などという行為には達しているかもしれない、という文になるのに対し、bの場合だと、行為そのものというよりは「花子が行く」というある種のレベルに着目しており、この場合だと「花子が行く」というレベルには達していないかもしれないが、「太郎が行く」「次郎が行く」「花子が立つ」「花子が見る」といったそれ以外の様々なレベルには達しているかもしれない、といった意味合いを含む文となるのではないだろうか。(6b)の例も同様に見てみると、「CDを買う」というレベルをマデモナイが打ち消しており、何らかの要素(ここでは“欲しい曲”)が「CDを買う」というレベルには達していないという事象を表している。また、この場合は比較的わかりやすい例であり、「CDを買う」というレベルには達していないにしても、「一曲だけ欲しい」というレベルには達している、という意味の文となっている。

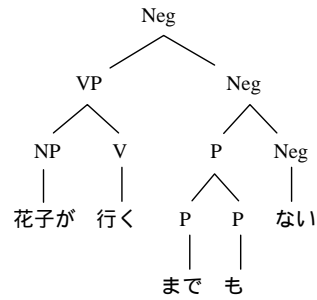
つまり全てのマデモナイ文において言えることだが、構造がaのようになっていると考えると、マデモナイ以前にくる動詞に着目しているだけの文となり、bのようになっていいると考えると、マデモナイ以前にくるものが表すあるレベルに着目しているような文となる。また、bのような見方をすると、「～マデモナイ」でひとかたまりの働きを有し、そのかたまり全体でそれ以前にくるレベルを「そこまでは及んでいない」と打ち消しているような文となる。

aとbの構造の違いはとても微妙なものかもしれないが、私は(1)(2)のどの例文も構造としてはbの方がより良い表し方をしているのではないかと感じる。

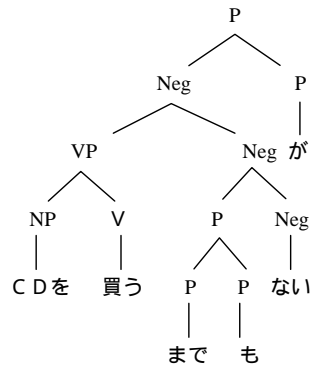
### 2.3.まとめ

よって、以上の考えから、本論中これ以降のマデモナイ文の tree は、案 b の方を採用したい。

(5) b.



(6) b.

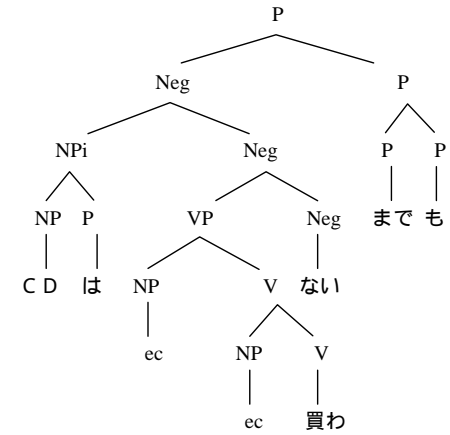


### 3. ナイマデモ

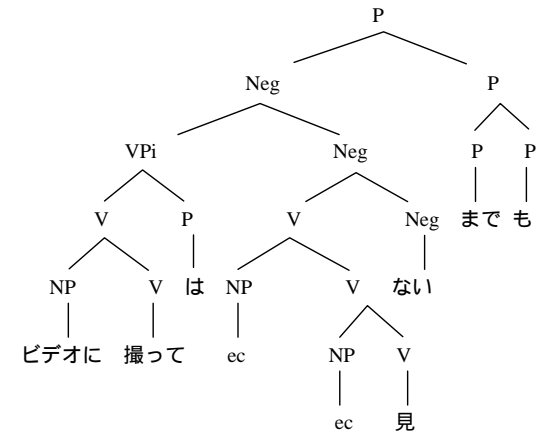
#### 3.1. ナイマデモの一般的な構造案

マデモナイ文とは違って、ナイマデモ文は、考えられる tree はおそらく一つである。実際にいくつかの例文を tree で表してみる。

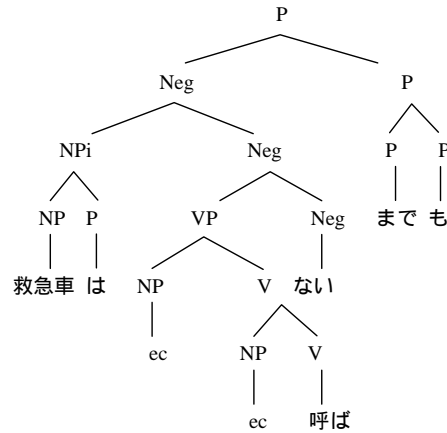
(7) a. (3a)の tree



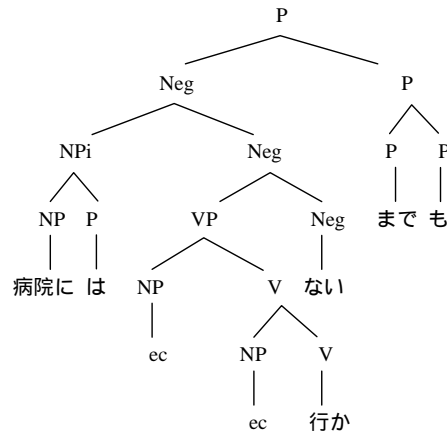
b. (3b)の tree



c. (3c)の tree



d. (3d)の tree



このように構造を見てみると、ナイマデモ文はナイとマデモが分かれ、それぞれ別の要素と Merge していることがわかる。ナイは動詞以下のものを c-command しており、直接打ち消しているのは直前になる動詞である。さらにマデモはそれまでに述べた文全体の要素すべてを c-command している。g~j の例文がマデモナイ文だと容認できてナイマデモ文だと容認が難しくなったのはここに要因があると考えられる。先に述べたように、ナイマデモ文は打ち消しの助詞ナイが直接その前の動詞にかかっているため、「V

する」という意味は完全に打ち消されてしまう。例えば(3a)の例文だと「買う」という動詞は直後のナイが Merge するため、完全に打ち消しの意味を受けるのである。同様に、(3b)なら「見る」という動詞は打ち消され、(3c)なら「呼ぶ」という動詞は打ち消されている。よって、(3g)~(3j)の例文はナイマデモ節の次にくる節の意味が、前の節とのつながりを考えるとおかしくなってしまうため、文全体としては容認が困難となってしまうのである。g~j は全て、マデモナイ文のときは「Vするマデモナイ、しかし敢えてVするなら…」といった意味の文であるので、後の節は「敢えてVする」といった意味合いを持つ文となっているのである。そのため、ナイマデモ文にそのまま置き換えたときに、どういう現象が起こるかという点、「いったん最初の節でVを否定しておいて次の節では“敢えてVする”と述べる」と述べる変な文章となってしまうのである。よって、ナイマデモ文とマデモナイ文は、構造の違いが例文においての容認可能不可能の違いを生み出していると言ってもよいと考えられる。

### 3.2. 「ナイ」「マデ」「モ」の組み合わせ表現に関する疑問点

ここまでマデモナイ文とナイマデモ文それぞれの tree を表示することによって、言うならば表面的な構造を見てきたが、ここまで見てきたときに、一つの疑問が浮かんでくる。マデモナイもナイマデモも、語順は違うにしろ「ナイ」「マデ」「モ」の単純な組み合わせで成り立っているというのに、これらを使った文を逆接の意味にしようとする、マデモナイ文だと「マデモナイガ」と逆接の助詞「が」が必要となるのに対し、ナイマデモ文だと「ナイマデモ」と何も挿入することなく逆接的な意味を表すことができる。これはどういうわけだろうか。そもそも、ナイマデモという表現そのものが、ひとまとまりで逆接的な意味合いを持つのだろうか。次は、その点に関して考えていきたい。

- (3) a. CDは買わないマデモ、一曲だけ欲しいって事、ありませんか。  
 b. ビデオに撮っては見ないマデモ、毎週見ている番組というのは結構ある。  
 c. 救急車は呼ばないマデモ、家で様子を見るのは心配だ。

これらの例文を見たとき、どの例文もやはりナイマデモ節が逆接的な意味合いを含むものとなっている。そのため、マデモの部分そのまま「ケレドモ」という助詞に置き換えても同じような意味を表すことができる。

- (8) (3)の置き換え  
 a. CDは買わないケレドモ、一曲だけ欲しいって事、ありませんか。  
 b. ビデオに撮っては見ないケレドモ、毎週見ている番組というのは結構ある。  
 c. 救急車は呼ばないケレドモ、家で様子を見るのは心配だ。

そのためここで、一つの案として、「マデモ」「ケレドモ」という案が挙げられる。

- d. 病院には行かナイケレドモ、どう調子が悪いみたいだ。
- e. わざわざ引き止めはしナイケレドモ、軽く声はかけてやれ。
- f. レインコートは着ナイケレドモ、小雨が降ってきた。
- g. ??改めでは言わナイケレドモ、本書は全て英語で書かれている。
- h. ??感想は聞かナイケレドモ、どうやら素晴らしかったようだ。
- i. ??敢えて書かナイケレドモ、ネットは発展途上のメディアである。
- j. ??長靴の危険性は教えナイケレドモ、実際に履いたまま水に浸かってみるとよく理解できる。

このように、マデモをケレドモに置き換えても、容認できる場合と容認困難となる場合とが、書き換え以前と対応している。

しかしこの案にのっとって考えてみたとき、次のような場合はどうだろうか。

- (9) a. 花子は行くケレドモ、君は行かなくていいよ。
- b. 十日までには提出するケレドモ、結構ぎりぎりになりそうだ。

先程の案の通り「マデモ」「ケレドモ」だと考えると、この場合のケレドモもマデモに置き換えることができる可能性が考えられる。

- (10) (9)の置き換え
  - a. \*花子は行くマデモ、君は行かなくていいよ。
  - b. \*十日までには提出するマデモ、結構ぎりぎりになりそうだ。

しかし結果はこのように、ケレドモをそのままマデモに書き換えただけでは容認がかなり難しい反例がでてきてしまう。その反例はいずれも、ケレドモの直前にきている動詞が肯定形のものばかりである。よって、マデモがケレドモとほぼ同じような意味や振る舞いを見せるのは、その直前にナイという打消しの助詞がきているときのみなのではないだろうか。しかしナイマデモがケレドモと同じ働きをするとは言えがたく、現にどの例文をとっても、ナイマデモの部分のままケレドモに置き換えた文は全く容認不可能な文になってしまう。

よって、いったんここまでの考えをまとめると、次のようになっている。

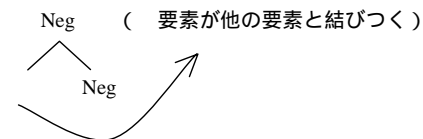
- (11) 「ナイ」+「マデモ」「ケレドモ」

「マデモ」「ケレドモ」  
「ナイマデモ」「ケレドモ」

### 3.3.提案： という要素を含むナイ

ここまで述べたような現象から一つの考えが導き出される。ナイという語の中に、例えば という要素が入っていたとする。つまり、ナイというものはすなわち「+ナイ」( は表記上見えない何らかの要素)であるとする。そうすると、一見「ナイ」+「マデモ」「ケレドモ」と見える現象は、実はナイの中の の要素がマデモと結びついて逆接の意味を持つようになっていると説明がつくのではないだろうか。

<ナイの内部構造>

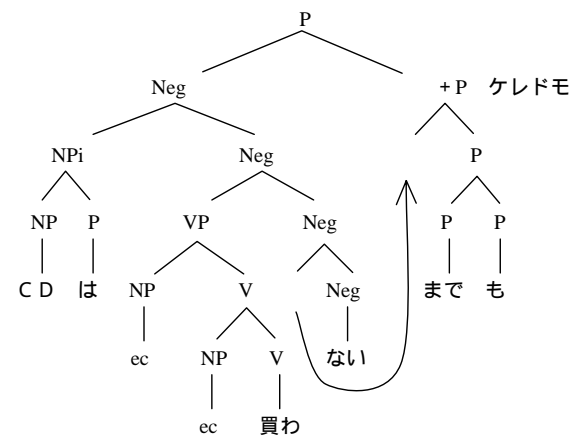


<ナイ マデモが逆接の意味を持つプロセス>

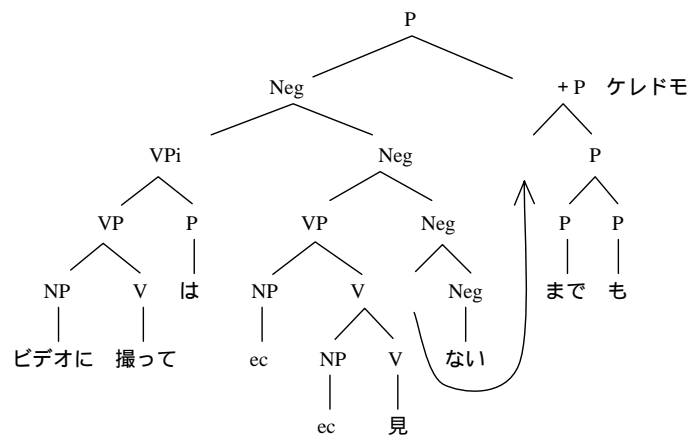
「 」+「マデモ」「ケレドモ」  
すなわち、ナイ「+マデモ」 ナイ「ケレドモ」となる。

この現象を tree で表してみると、

(3a)の tree



(3b)の tree



という構造となると私は考えている。ナイに含まれている（ただし名称は仮）という要素がマデモに Merge し、最終的には文全体を c-command しているため、ナイマデモ文は逆接的な意味合いを持つ文となるのではないだろうか。ちなみに(10a)の「花子が行くマデモ」というような文だと、ナイが存在しないため 要素もなく、マデモと Merge して本来作るべき逆接の意味を表すことができない。そのため容認不可能な文となっていると考えられる。

## 4. 要素

### 4.1. 色々な助動詞とマデモ

3.3節ではナイに含まれている 要素がマデモと Merge し新たな意味を生み出すプロセスの構造を明らかにしてきたが、ナイ以外にも 要素を含む語はないだろうか。

「～マデモ」という例文をここでいくつか挙げてみたい。

- (12) a. \*今季の復帰は無理ダロウマデモ、最終戦までは何かしらの形で登場したい。  
 b. \*今季の復帰は無理なハズマデモ、最終戦までは何かしらの形で登場したい。  
 c. \*今季の復帰は無理なヨウダマデモ、最終戦では何かしらの形で登場したい。  
 d. \*今季の復帰は無理にチガイナイマデモ、最終戦では何かしらの形で登場したい。

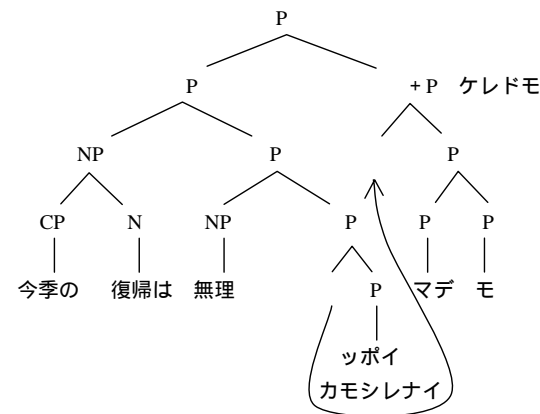
- e. 今季の復帰は無理ッポイマデモ、最終戦では何かしらの形で登場したい。  
 f. 今季の復帰は無理カモシレナイマデモ、最終戦では何かしらの形で登場したい。

このように、マデモの前に様々な助動詞を当てはめてみて、容認できるかどうかをチェックしてみた。するとダロウ、ハズ、ヨウダ、チガイナイなどの助動詞がマデモの前に来たときは容認不可能となるのに対し、ッポイ、カモシレナイなどの助動詞だとやや容認可能性が高くなるように感じる。よって、これらの助動詞は 要素の考え方にのっとると、次のように分けられる。

- (13) < 要素を含むと思われる助動詞 >  
 ナイ、ッポイ、カモシレナイ  
 (14) < 要素を含まないと思われる助動詞 >  
 ダロウ、ハズ、ヨウダ、チガイナイ

また、要素を含む助動詞とマデモが Merge している現象として、ナイのときと同様に(12e)や(12f)の「ッポイ」「カモシレナイ」の場合も次の様な構造となっている。

(12e,f)



### 4.2. マデモナイ文への応用

「～マデモ」文について 要素を仮定して新しい構造を提案してみたが、このような考え方でいくと、マデモナイ文はどのように説明付けられるだろうか。まず、ナイマデモは逆接の意味を有しているのに対し、マデモナイは1章で述べたようにひとかたまり



で「～に及ばない、レベルが達していない」といった意味合いを持つ表現である。同じ「マデ」「モ」「ナイ」の組み合わせでこうも意味が変わってくるのは、内部構造と文構成のプロセスに違いがあるためだと考えられる。

まずナイマデモ文の場合、3.3.で述べたように、

「 」+「ナイ」+「マデモ」 「ナイ」+「ケレドモ」  
 ↘ ( 要素はナイを越えてマデモにかかる )

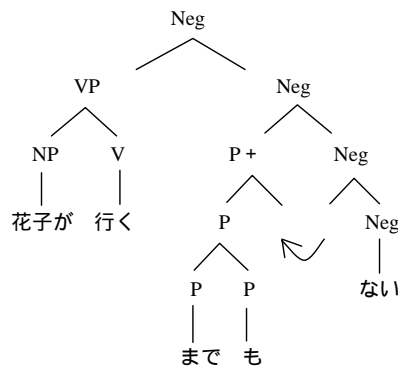
となっており、マデモナイ文の場合、

「マデモ」+「 」+「ナイ」 「(レベルが)及ぶ、達する」+「ナイ」  
 ↖ ( 要素は直接マデモにかかる )

となっていると私は考えている。

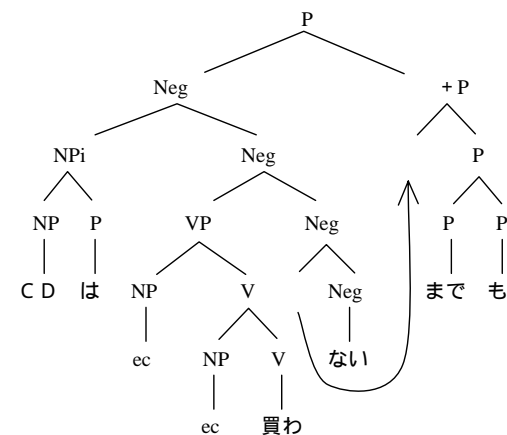
つまり 要素はナイの前にあり、それが直接マデモにかかっていくと、逆接の意味にはならず本来のマデモの意味を生かした「(レベルが)及ぶ、達する」といった意味を有するようになる。それに対し、ナイの前の 要素がナイを越えて後ろのマデモにかかる場合は本来のマデモの意味が変化し、逆接的な意味合いを持つケレドモのような意味合いになる。これらの違いを樹形図で表すと、次のようになる。

(15) マデモナイ文の tree の例



この場合、P+ 「(レベルが)及ぶ、達する」といった意味となる。

(16) ナイマデモ文の tree の例

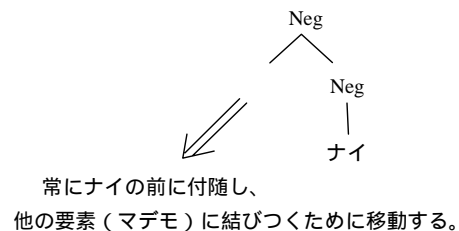


この場合、+P 「ケレドモ」といった意味となる。

#### 4.3. 要素のまとめ

以上のことから、要素はナイやッポイ、カモシレナイといった助動詞に含まれているというよりも、それらの助動詞の前に常に付随している要素であると考えられる。

(17) 要素の考え方(ナイの場合)



#### 4.4. 要素とナイマデモナイ

##### 4.4.1. ナイマデモナイの構造予測

要素がナイを超えてマデモにかかる場合と何も越えることなく直接マデモにかかる場合と同時にできた場合、つまりナイマデモナイという表現をした場合は、どうなるのだろうか。

- (18) 気持ちはわからナイマデモナイが、軽微なら違反をしても良いということはない。  
 (19) 見込みがナイマデモナイが、戦意を消失してしまった。

これらの例文からわかるように、ナイマデモナイという表現は、ほぼナイデモナイといった意味合いで使われているかナイデモナイという表現と混同されているか、といった感じで使用されているようである。おそらくナイマデモナイという表現は、意味が曖昧なため、それに似た表現のナイデモナイの意味が混同されてしまうのではないだろうか。先に述べたナイマデモ文とマデモナイ文の文構造のプロセスののっとなってナイマデモナイ文の構造を予測してみると、次のようになる。

(18) わから + +ナイ + マデモ + +ナイ わからナイデモナイ? …意味が曖昧  
 (要素がどちらからもかかっている)

(19) 見込みが + +ナイ + マデモ + +ナイ 見込みがナイデモナイ? …意味が曖昧  
 (要素がどちらからもかかっている)

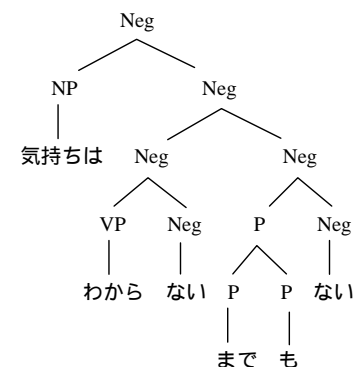
#### 4.4.2. ナイマデモナイの tree

3.2.1. でナイマデモナイの構造を予測してみたが、実際に tree を書いてみることによ

り、その構造を明らかにしてみたい。

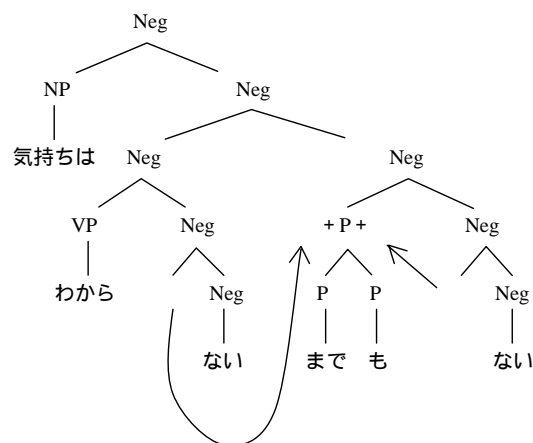
まず、要素を考慮せずに考えられる一般的な構造を示すと、次のようになる。

(20) a. 要素を考慮しない tree



仮にこのような構造であると考えたときに、ナイマデモナイはナイマデモという表現が有する意味よりもマデモナイという表現が有する意味の方がよく表れているような構造となっていると考えられる。この例文の場合だと、ナイマデモナイの始めのナイは「わかる」という動詞を単純に打ち消し、その後続くマデモナイはひとかたまりで機能し、一章で見たように「～に及ばない」といった意味を表す構造であると考えられる。つまりここでの文全体の意味としては、「気持ちはわからない、そういったレベルには及ばない」という意味となるはずである。しかし我々がこの文を理解するときに、そういった意味で理解しているかということ、そういうわけではないようである。我々の理解としては、「わからないまでもない」といった表現を聞いたときに、「わからないでもない」といった表現と似たような意味合いとして理解するのではないだろうか。このとき、ナイマデモナイはナイマデモが持つ逆説的な意味もマデモナイが持つ「～には及ばない」というような意味も持たず、いふならば非常に曖昧な表現となっていると考えられる。この現象は、要素の考えを取り入れてみると以下のように説明がつく。

b. 要素を考慮した tree



この構造ではどういう現象が起こっているかという、まず、ナイマデモナイの始めのナイの前に含まれている要素がナイを越えてマデモと結びついている。それと同時に、ナイマデモナイの二つ目のナイの前に含まれている要素がナイを越えることなく直接マデモと結びついている。つまりマデモには、始めのナイの要素と後ろのナイの要素との二つの要素が結びついてきているのである。

#### 4.4.3. ナイマデモナイの構造のまとめ

これまでのことから、以下のことが考えられる。

ナイマデモナイ文は、要素が二つあるため両側からマデモにかかり、それによってそれぞれの有する意味が打ち消し合われ、文全体としての意味合いは曖昧になってしまうのではないかと考えられる。そのためナイマデモナイ文はナイマデモのときに出てくる逆説的意味も持たず、マデモナイのときに出てくる「～に及ばない、達していない」といった意味も持たず、単なるナイデモナイに近いような意味をなんとなく持っている曖昧な表現となっているのではないだろうか。

### 5. まとめ

以上、ナイとマデモの組み合わせによって表現される「ナイマデモ」「マデモナイ」

「ナイマデモナイ」について、要素という考えを提案しながら分析してきた。今回はまず、マデモナイ文とナイマデモ文の構造を比較し、そうするうちに「なぜ同じ語の組み合わせなのに語順が違うというだけでこうも意味合いが変わってくるのだろうか？」といった疑問が出てきたため、本論のような方向性で論じてみた。

本論で私が意見として主張したい点は、マデモ文のなかで共起する助動詞には、マデモと作用できる何らかの要素(本論では要素と仮定)を持っているものと持っていないものがあり、その要素を持っているものと共起している場合に限って文全体としての意味が容認できるものとなる。さらにその要素が直接マデモにかかっている場合と何かの語を越えてマデモにかかっている場合とでは構成する意味が全く違って来る。ある要素がマデモに直接かかる場合は、本来のマデモの意味を若干残した「～に及び、達する」といった意味を持つのに対し、ある要素が語を越えてマデモにかかる場合は、ガなどの接続助詞を付けることなしに逆接的な意味合いを持つようになる。そしてその二つの場合が同時に起きたときは、お互いの意味がそれぞれを打ち消し合うような現象が起きるため、はっきりとした意味を持たない表現となる。そのため、先行研究で述べられていたようにナイマデモがそのままケレドモと同じ意味を持ち相関性を持っていると言えるかといえ、必ずしもそうではないと私は考えている。本論の主張にのっとって考えてみると、ナイの前の部分に付随している要素がマデモに結びつくことで初めてケレドモといった逆説的な意味合いを有しているのである。

このように、マデモという一見マデをさらに強調しているだけに見える表現一つをとっても、「ナイマデモ」「マデモナイ」などという大変興味深い表現を作ることができ、その構造内部では私の提案する何らかの要素が働きかけているのではないだろうか。本論で述べていることはあくまでも私個人の主張ではあるが、これまでマデモナイやナイマデモに着目して分析を行っている研究が少なかったため、今回の分析や意見が、今後の研究に少しでも役立てれば幸いであると考えている。今後は、要素の考えを他の様々な助動詞にも広げながら、更なる研究を進めていくとともに、自分の主張をより確かなものとしていきたい。

#### 謝辞

本論文の執筆にあたって、上山あゆみ先生には、ご多忙の中、数多くの貴重なアドバイスを丁寧な指導をいただきました。ここに、心から厚く感謝の意を表します。また、提出直前まで様々なご助言、ご助力をいただいた九州大学言語学研究室の皆様を始め、本論文完成のためにご協力いただいた全ての方に、最大限の謝意を表します。

## 参考文献

- 庵功雄（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク pp.363-383
- 小柳智一（1999）「中古のマデ - 第一種副助詞 - 」『国語学』vol.199,pp.42-54
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店 pp1072-1078